

自作肖像漫談

高村光太郎

青空文庫

今度は漫談になるであろう。この前肖像彫刻の事を書いたが、私自身肖像彫刻を作るのが好きなので、肖像というと大てい喜んで引きうける。これまでかなりいろいろの人のものを作った。

昔、ニューヨーク紐育に居てボオグラム先生のスチュジオに働いていた

頃、暫く同じ素人下宿に居られた鉄道省の岡野昇氏といわれる人が、私に小遣取をさせる気持で肖像を作らせてくれた。肖像で報酬をもらったのはこれが生れて初めての事なのでよく憶えている。先生の所で昼間働いて夕方帰って来てから岡野さんに坐ってもらった。日曜は休みなので朝から勢いこんで作った。七八寸位の小

さなものであった。それを石膏せつこう型にとって岡野さんは帰朝される時持ちかえられたが、帰国後石膏に斑はんでん点が出たという通知があった。その頃はその人に肖にせる事だけがやつとの事で彫刻としての面白さなどはまるで無いものであったろうと思われる。「兄貴に似ている」と岡野さんが言われたので、それなら他人と間違えられる事もあるまいと思つて稍やや安心した事を記憶している。令兄は法学博士岡野啓次郎氏という事であった。岡野昇さんは鉄道線路とシグナルとの設計見学に外遊せられていたのであったが、其頃の大宮駅の線路は同氏の設計らしく、引込線を錆さびさせないように苦心するのだと常に言つて居られた。ポストン停車場の線路はいいという事だったので、後日ポストンに行った時その線路

の配置を注意して見たが自分にはさっぱり分らなかつた。岡野さんは実に頭のいい人で何でもてきぱきと分つた。余程以前に一種のブレイン・トラストのようなものを組織せられた事があると記憶する。今もむろん健在の事と思うが、私のあの胸像はどうなっているかしらと時として思い出す。

私は外国に居る間、外に肖像を作らなかつた。日本に帰つてから丁度父光雲の還暦の祝があり、門下生の好意によつて私がその記念胸像を作ることになつた。まるで新帰朝の私の彫刻技術を父の門下生等に試験されるようなものであつた。はじめ作つて一同の同意を得たものは石膏型になつてから急にいやになり、一週間

ばかりで二度目の胸像を作り、この方を鑄造した。「世界美術全集」などに出ている写真はこの胸像であり、当時一般から彫刻の新生面と目されたのであるが、この胸像は実物の彫刻よりも写真の方がよい位で、甚だ見かけ倒しの作だと今では思っている。そのうち鑄つぶしてしまう氣でいる。父の胸像はその後一二度小さなのを作った事があり、死後更に決定版的に一つ作った。これは昭和十年の一周忌に作り上げた。今上野の美術学校の前庭に立っている。この肖像には私の中にあるゴチツク的精神と従ってゴチツク的表現とがともかくも存在すると思っている。肩や胸部を大きく作らなかつたのは鑄造費用の都合からの事であり、彫刻上の意味からではない。亡父の事を人はよく容貌魁偉かいいいというが、ど

ちらかというと派手で、大きくて、厚肉で、俗な分子が相当あり、なかなか扱いにくい首である。私は父の中にある一ばん精神的なものを表現する事につとめたつもりである。

私が日本へ帰ってから初めて人にたのまれて肖像を作ったのは園田孝吉男の胸像であった。相州二の宮の園田男別邸へ写生に行ったり、その著書「赤心一片」を精読したりしてほぼ見当をつけて作った。男は長く十五銀行の頭取だった人で、戦時献金運動の早期主唱者であった。その当時は最善を尽したのだが今日見ると製作にまだ疎漏なものがある。大震災の時男は二の宮邸で亡くなられたが、震災後、東京の邸宅でその胸像を再び見る機会を得た。

ブロンズの色が美しくなっていた。

その後私は日本の彫刻界にあまり立ち交らないような事になったので、私自身に直接に注文してくる人はめつたになかった。私が彫刻を作るといふ事を世人は知らない程であつた。光雲翁はあつと続かないとよくみんなが言つた。私は妻の智恵子の首を幾度でも作つて勉強してゐたものの、金がとれないので、父の仕事の原型作りを常にやつて生計の足しにしてゐた。父の依頼された肖像の原型を大小いろいろ作つた。大半は忘れてしまつた。十数箇年に亘る此の間の私の米櫃こめびつ仕事は、半分は父の意見に従い、半分は自分の審美判断に従つた中途半端な、そういう原型物であつ

た。折角苦心した肖像が父の仕事場で、星出し針で木彫に写される時むざんに歪められてしまうような事も少くなかった。松方正義老公の銀像、大倉喜八郎男夫妻の坐像、法隆寺貫主の坐像などが記憶にのこっている。松方老公のは助手として父に伴ついていつて三田の邸宅で写生した。老公は自分はビスマルクに似ていると人がいふと言つて居られた。そして額の中央が特に高く隆起しているといつて私に触らせてみせたりした。此の銀像は甚だ幼稚な出来であつた。大倉男はあまり肖にると機嫌が悪かつた。こせこせ写生などするようでは駄目だと言われた。当時蒙古方面の踏査から帰られたばかりで颯さつ爽そうとして居た。私は何と言われても町ていねに写生して帰つて来た。法隆寺貫主には父の宅でお目にかか

り、写真をとらせてもらい、其を参考にして油土で等身大の原型を作った。これは木彫に写された時大變違つてしまった。曾て帝展に出品されたのがその木像である。貫主のような清浄な、静かな、深さのある人の肖像を自分の思い通りに製作したいなと思いつながら、結局父の木彫に都合のいいように作つた。父の仕事の下職としては随分愚劣なものもかなり作つた。

その年月の間に私はアメリカ行を計画してその資金獲得のために彫刻頒布会を發表したが入会者があまり少なくて、物にならずに終つた。モデルを十分使つて勉強する事も出来ないので智恵子がいよいよモデルになつた。彼女のからだは小さかつたが比例がよ

くて美しかった。

彫刻頒布会を発表した頃、日本女子大学の桜楓会から校長成瀬仁蔵先生の胸像をたのまれた。丁度先生はその時永眠せられてしまった。お目にかかったのも逝去数旬前の病床に於いてであった。この胸像はなかなか出来上らず、毎年一個平均ぐらいに原型を作つては壊し、大震災の午前十一時五十八分四十五秒も丁度その胸像をいじっている時であつた。その胸像は先生の十七回忌の年にやっと出来上つて目白の講堂に納めた。長くかかつたわりに思うように良く出来なかつたので恥かしく感じた。その時代に中野秀人君や黄瀛君コウエイや住友芳雄君の首も作つた。住友君のが一ばん良かつた。

今美術学校と黒田記念館とにある黒田清輝先生の胸像は二三年かかって其後つくった。これは黒田先生を学生時代によく見ていたので作りよかった。先生の頭蓋ずがいの形の特異さが殊に彫刻的に面白かった。所謂いわゆる法ほうねん然ぜんあたまである。この頃から私もだんだん彫刻性についての自分自身の会得に或る信念を持つようになった。

この胸像が出来てから間もなく、智恵子の頭脳が変調になった。それから長い苦闘生活の連続であった。その病気をどうかして平癒せしめたいと心を砕いてあらゆる手を尽している期間に、松戸の園芸学校の前校長だった赤星朝暉翁の胸像を作った。これも

精神異状者を抱えながらの製作だったので思ったよりも仕事が遅れた。智恵子の病勢の昂進こうしんに悩みながら其を製作していた毎日の苦しさは今思い出しても戦慄せんりつを感じず。智恵子は到頭自宅に置けないほどの狂燥状態となり、一方父は胃潰瘍いはいようとなり、その年父は死去し、智恵子は転地先の九十九里浜で完全な狂人になってしまった。私はその頃の数年間家事の雑務と看病とに追われて彫刻も作らず、詩もまとまらず、全くの空白時代を過した。私自身がよく狂気しなかつたと思う。其時世人は私が彫刻や詩作に怠けていると評した。やがて智恵子を病院に入れてから、朝夕智恵子の病状に気を引かれながらも少しづつ製作が出来るようになり、父の一周忌にその胸像を完成した。それから九代目団十郎の首を

作りはじめたが、九分通り出来上るのと、智恵子の死と一緒に来た。団十郎の首の粘土は乾いてひび割れてしまった。今もそのままになっているが、これはもう一度必ず作り直す気である。西^チベツト蔵学者河口慧海先生の首や坐像を記録的に作ったのもその頃である。今年はお許を得て木暮理太郎先生の肖像にかかりはじめているが未完成の事だから多くを語り得ない。

彫刻家生活をつづけて居て、今最も残念に思うのは、西園寺公の肖像を作る機会を逸してしまった事である。父の生きているうちなら何とか方法もあったと思うのに、今となっては老公も亦年をとられてしまったし、又一介の在野の彫刻家としての私にはど

うする事も出来ない次第である。政治家の面貌を見て彫刻的昂奮を感ずる事はめつたにないのだが、西園寺公だけは以前から作りたかった。その風貌に深さと味いと豊かさと気品とが備つていて、存分に打ちこんで仕事が出来ると思つていた。公の風貌の日本的、東洋的なものには大きさがあり、高さがあり、こまかさがあり、汲み尽せないような奥の深い陰影があり、世界に示すに足りると思ふのである。こういう方の在世時代に自分も生きていながら、ついにその彫刻を作り得ずにしまう事はのこり惜しいが是非もない。こういう類の深と大とのある風貌の人は当分日本に生れそうもないような気がする。中華民國には或はあるかも知れないが、中華民國となると又すっかり特質の違つたものになる。

私は智恵子の首を除いては女性の肖像をあまり作っていない。

はるか以前に歌人の今井邦子女史の胸像をつくりかけたのに、途中で粘土の故障でこわれてしまったのは惜しかった。幸い写真だけが残っていて女史の随筆集の挿画になっている。女史の持つ精神の美と強さが幾分うかがわれるかも知れない。あの首は大理石で完成するつもりで石まで用意してあったのである。これから機会を捉えて日本女性の新鮮な美を肖像としてたくさん作って置きたい。一体に女性のよい肖像彫刻は思ったよりも少ない。これは美しく作るという成心を作者が持ち易いためではないかと思う。ロダンのノアイユ夫人などは最も優れた作の方で、この高雅な女

流詩人の精神と肉体との美が遺憾なく表現されていて、それを見ていると人間の誇を感じる。私は出来れば日本女性の簡潔な、地についた美が作りたい。お手本になってくれる人がたくさんあればいいと思う。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集第4巻」小学館

1989（平成元）年4月1日初版第1刷発行

1994（平成5）年9月10日初版第2刷発行

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2006年11月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

自作肖像漫談

高村光太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>